

花ざかり

小島政二郎

くんとおのれは
書い一人は

花ざかり奥付／定価六百五十円

昭和四十五年四月二十日初版第一刷発行

著者小島政二郎

装釘者高松次郎

発行者大門八郎

撮影者松田二三男

制作担当者大村詔宣・山崎佳美

表紙製版印刷者土山卓平

本文印刷者堀内文治郎

製本者関川安治

発行所株式会社ロングランプレス

〒162 東京都新宿区水道町五十三番地西山ビル電話二六〇局三〇一二番

年寄が昔話をしたがる訳が、近頃になってやっと分った。

それは現在よりも、昔の方がよかったからに違いない。主観的にいゝばかりでなしに、客観的に見ても、昔の方がよかったからに違いない。

現に、私の子供の頃の上野を思い出して見ても、現在よりも遙かによかった。町も奇麗だったし、ああせこましくなかったし、ああうるさくもなかったし、静かで、青いものは多かったし、町全体が一つの絵になっていた。町に一種の雰囲気があった。

家を持っている人は勿論のこと、借りて住んでいる人達も、家を大事にして拭き掃除を怠らなかった。家ばかりでなく、町を愛する氣風があったから、朝晩家の前を掃き清め、水を撒くことを忘れなかった。

今のように水も撒かずに、パアパア掃くような不作法な人なんか一人もいなかった。

混雑している中を通る時にも、今のように黙って肩や肘で突きのけて通るような無礼な奴はいなかった。仲間同志ではおしゃべりのくせに、こんな時にはまるで口がないような奴等だ。

周圀五カ町内ぐらいの人達は、いつどこで知ったのか、おのずからお互いに顔を見知っていて、途

中で俄雨^{にわか}になど合った時でも、

「柳河屋さん——」

と、向うから呼び留めて、頼みもしないのに傘^{かさ}を貸してくれた。

情操教育とか、公德心とかはそれぞれの家庭で仕込んだばかりでなく、町が無言のうちに教えてくれた。

下駄の脱ぎ方、障子の明けたて、言葉遣いなども、きびしく仕込まれた。ちゃんとしないと、家の者が許さなかったし、町内付き合いも出来なかった。

「何だい、あすこの息子は——」

すぐそう言って笑う者にされた。だから、どうしたって口の利き方、下駄の脱ぎ方、障子の明けたてだって作法に叶^{かな}うようになる。

万事が奇麗で、見た目にも快かった。社会生活というものは、そういうものだろう。

変な、小言幸兵衛見たいなことを書いてしまったが、こんなことを書くつもりはなかったのだ。ただ上野近辺が住みいゝ町だったということが言いたかっただけだ。

私は下谷町一丁目で生れて育ったが、今では町も何も変り果ててしまつて、懐かしくも何ともない。こんなことではイケないと思う。パリ生れのアナートル・フランスという小説家は、自分の生れて育った町の石畳一つをも懐かしんでいる。そうして自分を教育してくれたのは、パリの町だと言ってい

る。

いや、私はこんなことも言うつもりはなかったのだ。上野の周囲の町々に、その頃美人が三人いた。小絲源太郎さんのお母さん、これは元黒門町、三橋町に鬼床おにどこという髪結床かみゆいどこがあった、そこのお上さん、それから私の口からは言いにくいのだが、私の母――

自分のお袋のことは、さして美人とも思わなかったのだが、糝粉細工しんこの小父さんが、私の母の嫁入って来た時の話をしてくれて、口を極わめて褒めたたえるのを幾度も聞いた。

三美人の評判も、この糝粉細工の小父さんから聞いたのかも知れない。いやいや、そうではない。上野山下に釜屋かまというスキ焼屋があった。富田常雄君の小説の中によく出て来る。

ここの小父さんが、私の父と義兄弟で、私を養子に欲しかったらしい、小母さんと二人で大変可愛がってくれた。この二人も、三美人の噂をしていたのを覚えている。

とにかく、小絲さんのお母さんは、キリッとした奇麗な方かただった。子供心にも奇麗だなあと考えたことを覚えてる。百万石加賀さまお抱えの火事師ひごとし――いわゆる加賀鳶とびの娘さんだそうだ。

鬼床のおかみさんも、これはネットリとした色気のある美人だった。息子の徳太郎というのが、私と小学校が一緒に、遊びにも行き、遊びに来たりしていたが、このお母さんが、こぼれるような愛嬌のある美人だった。

おとっさんは、言うまでもなく職人上がりだから、恐らく大して教育があるとは思えない。そうい

うところへお嫁に来たのだから、このお上さんも、似たり寄ったりの生れだろうと思っていた。

ところが、これが漢学者の娘か何かで、学校から帰って来ると、徳太郎君はおッ母さんにつかまうて漢書を勉強しないことには、私と遊ばしてもらえなかった。

「政ちゃんもいらっしやい」

ポカンと待っている私を見兼ねたのだろう、しまいにはそう言つて徳太郎と一緒に机の前に坐らされて、「小学」の素読を教えられた。

帰つて、その話をする、父も母も目を丸くして

「ヘエー」

と言つて、顔を見合せた。父も母も、鬼床の小父さんのところへ嫁いで来る前の、小母さんの素姓を知つていたらしい。それだけに「小学」の素読は余りにも意外だったのだろう。

私はその後一度も読んだこともない「小学」の中の一節を、いまだに時々ふと口誦むことがあるが、それはこの小母さんから受けた素読のお陰だ。

この小母さんについては、いろいろ後日談があるが、ここには書けない。三人とも私には懐かしい忘れられない人達だ。

前書きがあつて

ゆく年や草の底ゆく水の音

という句が久保田万太郎の作にある。いい句だし、私達が昔を思い出す感じがこれに似ている。

私は下谷に生れた。無論明治生れだが、その頃はどこの家も約よしくつて、日常の食べ物なんか、安いのばかりだった。あんなものばかり食べていて、よく生きて来られたものだ。と今から振り返つてそう思う。実際、栄養が足りなくて、肺病などになって死んだ友達が多かった。

私が食いしん坊になつたもとはと言へば、この粗食にあつたように思う。子供心にも、死ぬのがいやだったのだろう、小遣いを溜めてフライパンを買つて来て、自分で見よう見真似に洋食まがいの物をこしらえて、小僧や番頭達を喜ばせたのが始まりだった。

この肉食のお陰で、私は栄養失調にならずに今日まで生き伸びて来られたのだと自分では思っている。だから、子供の頃食べさせられた魚や野菜が、いまだに嫌いだ。年を取ったら、肉はよせと医者は言うけれど、肉をよしたら、私には食べる物がない。

今でも、私はしつこいもの、脂っこいものでないと、食べた気がしない。酒を飲むではなしタバ

コを吸うではなし、一方では一生懸命体に気を付けているのだから、このくらいのがままは命に大して障りはないのだろうと自分勝手に極めている。

子供の頃は、世間一般がそう言った風に万事粗食だったから、お正月だとか、初午^{はつうま}だとか、誕生日だとか、大掃除の日だとかいうと、店屋物^{てんや}を取ってくれる、それがどんなに嬉しかったか今の人には想像もつかないだろう。

「今夜は好きな物が食べられる」

そういう期待に、番頭も、小僧も、女中も、息子の私達まで、大掃除の日というと、喜々として働いたものだ。不断とガラリと調子の違う一日を楽しむ気持ちもあった。

夕方になると、番頭が紙と筆とを持って

「お前は？」

「お前さんは？」

と一人一人に食べたい物を聞いて、しめて天井が幾つ、寿司が幾つ、うなぎ^{どんぶり}井が幾つと書いたものを小僧に渡す。

それを持って、小僧が駆け出して行く。天井なら甲子^{きのね}——この店は今でもあるだろうか。上野の山下の東側にあった。そこにお艶ちゃんという奇麗な子がいて、私とは同じ小学校の一年下だった。自転車に乗ったり、馬に乗ったり、その頃の言葉でいうと「お転婆娘」だったが、サッパリとした気性で、

みんなから親しまれ、みんなの憧れの的だった。

私とは、木具七きぐしちという家で毎月催される無尽むじんでよく会った。「おつやちゃん」「政ちゃん」と呼び合う仲だったが、お艶ちゃんには魅力があったが、私には魅力がなかったのだろう、それ以上にはならなかった。

今私は無尽と言ったが、今の人には分らないのではあるまいか。或いは頼母子講たのもしこうと言ったら、幾らか分るのだろうか。しかし、現在では都会ではこういう事実がないだろうから一応説明して置かないと無理かも知れない。

一ト口にいえば、町内の人々が寄り合って、金に困った人に金の融通をし合う庶民的な組合見たいなものだ。

月に一回、十円とか二十円とかずつ持って集まって、籤くじを引いて当たった者が、五百円とか千円とか受け取るのだ。

小商人こあきんどや、職人さんなど、一時凌しのぎが付いて助かる。しかも、受け取った五百円なり千円なり金を返す必要がないのだ。毎月の掛け金を十円なり二十円なりずつ掛け切れれば、おのずと返したことになるようになっていた。

そういう本籤の前に、花籤というのがあって、当ると、五十銭ぐらいもらえる。子供にとって、五十銭といえば、思い切りいいお小遣いだ。一ト月は優に楽しめる。それが欲しさに、私達は無尽に行

くのを楽しみにしていた。行けば、何かしらお茶請けのお菓子が出る。それも楽しみの一つだった。

「思い出すなあ」

町の静けさを——。宵の町内の仄明さ^{ほのあかる}を——。まだ今のように電燈が行き渡らず、私の家など、店はガス燈をともしていたが、軒燈は町内揃ってランプを付けていた。往来は舗装されていず、銀座以外は土のままだった。「春の土草履の下に柔かし」という俳句があるが、実際、踏み心地が柔かくて心地よかった。その代り、雨や雪の降ったあとは、到る所ドロコになって困った。

三

甲子^{きのね}は、間口の広い、大きな店だった。

甲子ばかりでなく、山下一体、上野駅でおりました汽車の客、或いは四季それぞれの、上野公園へ遊びに来る客目当ての食べ物屋が、ズラリと軒を並べていた。

上野駅の真正面には、山城屋、井筒屋、若葉屋、都の田などという宿屋があり、郵便局があり、土産物屋があり、岡埜という餅菓子屋があった。高梨という土産物兼果物屋^{けん}には、何という名だっけなあ、瘦せた姿のいい浮気娘がいた。××ちゃん、御免よ。

駅の前から山下になる角には、「だるま」という大きな何でも屋があった。大きな土間の間口に、幅の

広い丈の長い暖簾が掛かっていて、それに鉢巻をした達磨さんが染め出されていた。ここは上って食べられる家で、何でも屋というのは、お汁粉も食べられるし、お寿司も食べられるし、天麩羅も食べられるし、好きな日本料理の一品料理も食べられると言ったような家だった。便利だし、安いし、よくはやっていた。

すぐ近くに、五条天神があって、背の高い、丁髷を結った品のいい神主さんがいた。息子と娘とがあって、息子は私の兄と同級生だったように覚えている。娘さんは瀬川いと子と言って私よりもずっと若く、現在長谷川かな女門の俳人で、確か浦和で美容室を経営してはやってしていると聞いた。

その隣が甲子で、ここも二階に客を上げて食事をさせていた。初めは瘦せて背の高い主人が鍋の前に立っていたが、そのうちに職人まかせになって、縮緬の兵庫帯なんか締めて、よく往来でどこかへ遊びに行く姿を見掛けた。

二三軒何屋かがあって、その隣が雁鍋——明治維新の上野の戦争の時、大村益次郎がこの二階へ大砲を引き上げて、彰義隊の立て籠る寛永寺に向って最後の攻撃を加えたという話のある有名な家だ。この家をこの目で見て知っているということは、江戸時代の家屋の構造、店構えを知っているということになる。と言ったところで、片鱗を知っているだけだが、それでも私の生活にいろんな意味で得をしたと思っている。少し大袈裟に言えば、生きた江戸を——本や絵でなしに、生き残った江戸の雰囲気を感じたということとは、長じて小説家になった私には、得易からざる、そうして思い掛けざ

る収獲だった。

それに、上野の入口に立っていた黒門を、立っていた場所で見たことも、私には忘れられない。このことは後に書く。ついでにもう一つ付け加えれば、江戸時代から続いていた伊予紋いよもんという一流の料理屋を見て知っていることも、私には仕合せの一つだった。

雁鍋は、それこそ間口の広い広い、総二階の、大きな大きな構えで、いかにも江戸の大工の建てたらしい無骨な、がんじょうな、実用一点張りの普請だった。

入口の長押ながしの上の壁のところに、名人と言われた伊豆の長八が鋺こてで細工をした羽根を揚げた雁が三羽浮き彫りにしてあった。国会議事堂を遠くから眺めると、いかにも線が堅くって死んでいるが、壁土を鋺でこねた雁の絵は生きていた。

よくは知らないが江戸時代には、雁の肉なんて、上つ方うへがたの口くちしかはいらなかったものだそうだが、それを雁鍋は一般庶民の口にもはいるようにしたので、すこくはやったと聞いたが、近所の噂では、雁なんか一年中いるものではなし、ほかの鳥の肉を食わすのだと言っていた。

私も一度だけ連れて行かれたが、二階は、ただダダッびろいだけの大広間で、その頃ははやっていなかったせいかな、殺風景を極わめていた。食べさせられた肉は、何の肉か子供の口には分る道理はなく、別に特にうまいとも思わなかった。牛肉や鶏とりの肉の方がずっとうまかった。

この雁鍋のあとが、現在の「世界」だ。

雁鍋の隣が釜かまやという牛屋ぎゅうやだ。今のスキ焼屋だ。この家は私の小父さんの家で、富田常雄さんの明治小説にしぼしぼ出て来る。この家は今はもうない。が、私の記憶には、ありありと残っている。誰だかの句に、「長話火事の半鐘に消されけり」というのがあるが、火事の半鐘が鳴るまで私の思い出を語らしてもらおう。

というのは、明治の一風俗であつた「牛屋の姐さん」について一ト筆費したいのだ。今は消えてなくなった好ましい下町の一風俗を書き残して置きたいのだ。

現在は牛屋、鳥屋というものが数少なくなったが、私の育つ頃は、今の洋食屋、支那蕎麦屋の如く、牛屋、鳥屋が到るところにあつたものだ。現代では、牛屋と寿司屋とが滅法高くなったが、その頃は、安くつてうまいものの代表みたいな存在だった。その上、その時代は、男と女とが口を利く機会が今のように自由でなかったから、そういう意味でも、牛屋、鳥屋がはやったのだらうと思う。一円ぐらの金を持っていれば、酒が飲めて、うまい牛肉が食えて、その上給仕に出る女中と好き勝手な口が利けたのだから――

ほかには、そういう場所は皆無と言つてよかつた。その上、その中には男好きのする姐さんが大勢いた。

四

その頃の青年は、今の青年のように女性との交際と言うものがまるでなかった。その点、哀れなものだった。

しかし、これは本当はもっとあとで言うべきことだが、実際は哀れとなんか思っていないかった。説あり。いずれ聞いて頂こう。

とにかくその頃の青年は、女性と口を利く機会が全くなかった。小学校から男女別々の授業だったし、中学校は男の学校、女の学校は女学校。高等学校、大学は全部男の学校で、女には高等学校と言うものではなく、目白に女子大学が一つあっただけだった。東京女子大学はあとで出来、津田は女子英学塾と言った。つまり、どこまで行ってもハッキリ男と女とは別々にされていたのだ。

男と女と一緒にするのは、新年の歌留多の会と、夏海水浴へ行った時、友達のお姉とか妹とかといった場合に限られていた。

そんな一年一度の好機会にだって、監督の目がきびしかったから、

「今度の土曜日に映画見に行かない？」

なんて誘惑することはまず不可能だった。第一、もっと言葉が丁寧だったから、とっさの用をなさ

なかったし、男女の会話に熟練していなかったから、下手でもあった。

その頃の青年が、女性を見ることの出来るところと言ったら、寄席以外にはなかった。落語の寄席を色物と言ったくらいだから、落語のほかに若い奇麗な女が出て、長唄か、常磐津か、清元か何かを唄って、あとで踊を見せてくれたものだ。今でも覚えていいる。式多津しきたつと言うのと、歌子と言うのといて、人気を集めていたのを――

これとて、ただ遠くから見ているだけで、口が利ける訳ではなし、交際が出来る訳ではない。あとは、女義太夫専門の寄席へ聞きに行くぐらいのもだった。この方は、女ばかり出て派手で賑かで濃厚で、美しい語り手が多かった。

ただその頃は夜の十時というと、店の大戸を締められてしまう。因果なことに、女義太夫の寄席は近間ちかまには一軒もなかった。浅草まで遠出をしなければならなかった。そうなると、十時までに帰って来ることは不可能だった。父の目が恐かったので、私は余り女義太夫の寄席へは通わなかった。

それでも小清こせい、小土佐、綾之助などと言う一流所どころは聞いている。この人達は、色気で売る年頃ではなく、いいお婆さんだった。それだけに女義太夫として聞くに堪える立派な芸を持っていた。高濱虚子の「俳諧師」という長編小説の中に出て来る女義太夫は、若い花盛りの頃のお小土佐だとか聞いている。そのほか、有楽座の名人会で、大阪上りのお昇あき昇しょうも聞いている。

しかし、当時最も美しくって人気のあったのは、昇菊、昇之助の二人だったろう。北原白秋の「東京

景物詩」の中に、この二人を唄った調子のいい詩があったのを覚えてゐる。当時の零困氣がよく出てゐるので、ここへ拔萃びやくすいしようと思ひ、捜したのだが、どこへ行つたのか見当らず、残念である。

とにかく当時の青年は、バアはなし、カッフェはなし、高座こうざの上の美しい芸人を眺めるほかに女を見る機会がなかった。芸者を上げて遊ぶ資力はなし、方法も知らず、吉原や洲崎すさきへ女を買いに行く勇氣もないとなると、牛屋ぎゅうやか鳥屋へ上つて、その姐さんと口を利く以外に道はなかった。

彼女達は、数え年で十七八から三十留まりだつたらう。銀杏返しいちょうがえに結つて、恐らく銘仙めいせんなんて絹物は着ていなかったのだらう。何と言う物を着ていたのだらうか。立ち居の激しい商売だから、体裁のいい、一見絹物のような、丈夫な木綿の着物だつたのだらうか。十七八の若い身空で、おもに縞物しまを着ていたように覚えてゐる。派手な前掛けを締めていた。

客となつてはいつて行くと、下足番が

「いらっしゃい」

と声一杯に叫んで迎えてくれる。下駄を脱ぐと、大きな下足札を渡される。上り口の板の間は、辻すべるくらいよく拭き込んである。その上、牛の脂ぎゅうあぶらで光つてゐた。

正面に幅の広い梯子段。それを上つて二階へ行くと、四十畳敷きぐらいの広間になつていて、客は入れ込みだ。

上つたところに女中が大勢待つていて、その中から受持ちの女中が適当な場所へ案内してくれる。